

久平書

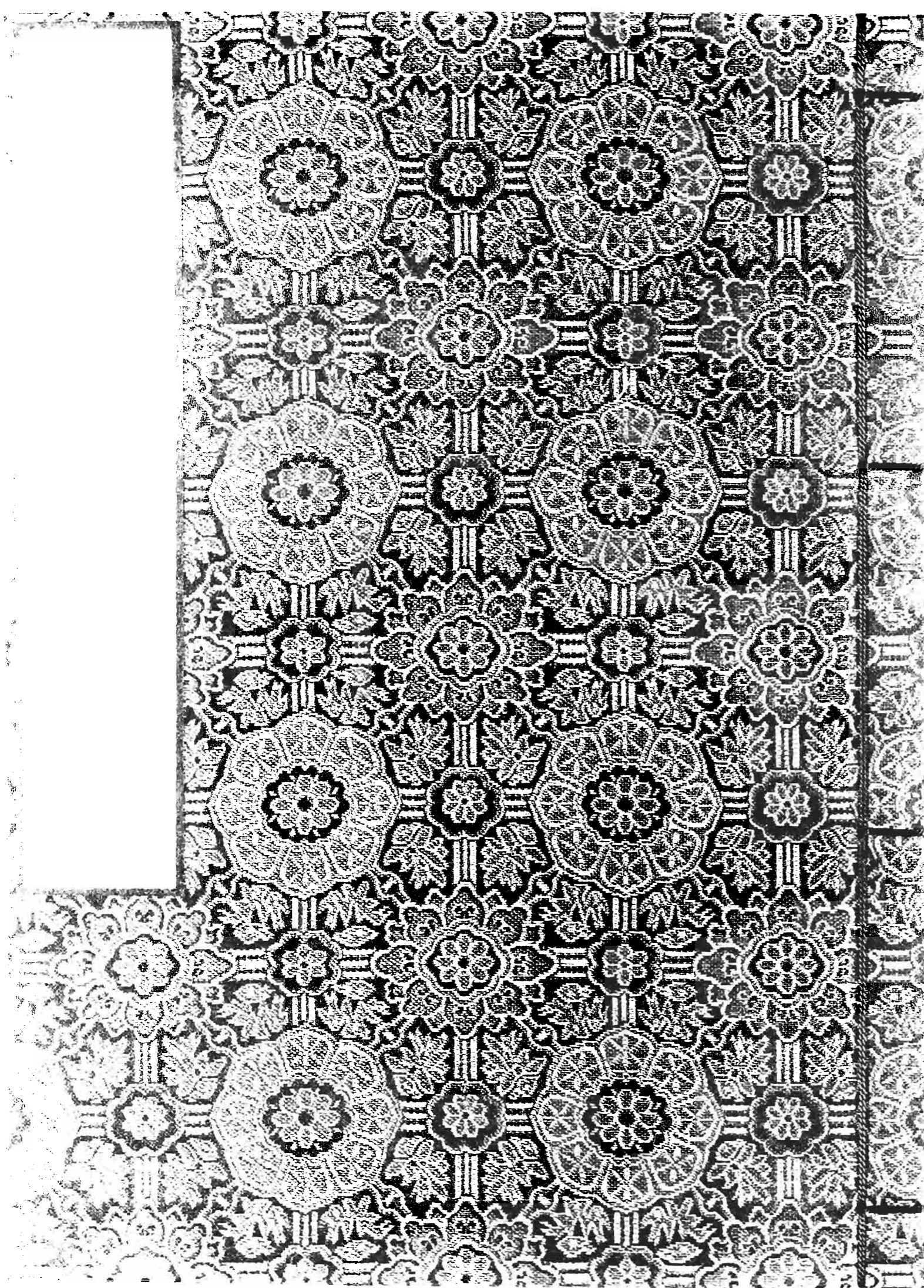
一、此書は...
二、此書は...
三、此書は...
四、此書は...
五、此書は...

久平書

一、此書は...
二、此書は...
三、此書は...
四、此書は...
五、此書は...

仙田節

仙田節...
仙田節...



琉歌集

皇太子御成婚御紀

宮良尚智

皇太子御成婚御紀

記入

皇太子御成婚御紀

琉歌奇

嘉武鶴屋年風

以なきわら風

琉歌奇流草歌

Handwritten lyrics in Ryūka style, written vertically in cursive. The text is a traditional form of Okinawan folk song, consisting of several lines of calligraphic characters.

お前がわが身をいかに守りておられしに
お前がわが身をいかに守りておられしに
お前がわが身をいかに守りておられしに
お前がわが身をいかに守りておられしに
お前がわが身をいかに守りておられしに
お前がわが身をいかに守りておられしに
お前がわが身をいかに守りておられしに
お前がわが身をいかに守りておられしに
お前がわが身をいかに守りておられしに
お前がわが身をいかに守りておられしに

結
義
書
教

お前がわが身をいかに守りておられしに
お前がわが身をいかに守りておられしに
お前がわが身をいかに守りておられしに
お前がわが身をいかに守りておられしに
お前がわが身をいかに守りておられしに
お前がわが身をいかに守りておられしに
お前がわが身をいかに守りておられしに
お前がわが身をいかに守りておられしに
お前がわが身をいかに守りておられしに
お前がわが身をいかに守りておられしに

お
前

お前がわが身をいかに守りておられしに
お前がわが身をいかに守りておられしに
お前がわが身をいかに守りておられしに
お前がわが身をいかに守りておられしに
お前がわが身をいかに守りておられしに
お前がわが身をいかに守りておられしに
お前がわが身をいかに守りておられしに
お前がわが身をいかに守りておられしに
お前がわが身をいかに守りておられしに
お前がわが身をいかに守りておられしに

長平屋 数保

地蔵... 伊保... 西... 百...

長平屋 数保

馬... 西... 百... 伊保...

家花并筆

一
海
一
一
一
一
一
一
一
一

中城

一
一
一
一
一
一
一
一
一
一

和

揮
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一

發

一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一

一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一

巽て言

大徳の心より出づる徳の道は道徳の道徳に在りて
徳の道徳に在りて徳の道徳に在りて徳の道徳に在りて
徳の道徳に在りて徳の道徳に在りて徳の道徳に在りて
徳の道徳に在りて徳の道徳に在りて徳の道徳に在りて
徳の道徳に在りて徳の道徳に在りて徳の道徳に在りて

大徳の心より出づる徳の道は道徳の道徳に在りて
徳の道徳に在りて徳の道徳に在りて徳の道徳に在りて
徳の道徳に在りて徳の道徳に在りて徳の道徳に在りて
徳の道徳に在りて徳の道徳に在りて徳の道徳に在りて
徳の道徳に在りて徳の道徳に在りて徳の道徳に在りて

天竺の地を記す

海邊板に刻すは天竺の地を記す
美に刻すは天竺の地を記す
美に刻すは天竺の地を記す
美に刻すは天竺の地を記す
美に刻すは天竺の地を記す
美に刻すは天竺の地を記す
美に刻すは天竺の地を記す
美に刻すは天竺の地を記す
美に刻すは天竺の地を記す
美に刻すは天竺の地を記す

天竺の地を記す

天竺の地を記す
天竺の地を記す
天竺の地を記す
天竺の地を記す
天竺の地を記す
天竺の地を記す
天竺の地を記す
天竺の地を記す
天竺の地を記す
天竺の地を記す

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

善屋武那河

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

一、

大兼文部
大兼久部

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

平敷
平敷

秋の白雲と夕陽の紅霞
秋の白雲と夕陽の紅霞
秋の白雲と夕陽の紅霞
秋の白雲と夕陽の紅霞
秋の白雲と夕陽の紅霞
秋の白雲と夕陽の紅霞
秋の白雲と夕陽の紅霞
秋の白雲と夕陽の紅霞
秋の白雲と夕陽の紅霞
秋の白雲と夕陽の紅霞
秋の白雲と夕陽の紅霞
秋の白雲と夕陽の紅霞

梅の香りと松の葉の音
梅の香りと松の葉の音
梅の香りと松の葉の音
梅の香りと松の葉の音
梅の香りと松の葉の音
梅の香りと松の葉の音
梅の香りと松の葉の音
梅の香りと松の葉の音
梅の香りと松の葉の音
梅の香りと松の葉の音
梅の香りと松の葉の音
梅の香りと松の葉の音

仲村抄

仲村抄
仲村抄
仲村抄
仲村抄
仲村抄
仲村抄
仲村抄
仲村抄
仲村抄
仲村抄
仲村抄
仲村抄

Handwritten text in Arabic script, likely a religious or philosophical treatise. The text is arranged in approximately 12 vertical columns, reading from right to left. The script is dense and cursive, characteristic of classical Arabic calligraphy.

Handwritten text in Arabic script, continuing the text from the previous page. It is arranged in approximately 12 vertical columns, reading from right to left. The script is consistent with the first page, showing a high level of fluency and style.

志川の津波に驚し身が波たふらん
人心の底に沈むるも
大なる波に沈むるも
隠れぬるも
と云ふも
花のちや
人
胸中の鏡

心あふけ胸中の鏡
肝の鏡
胸中の鏡
大なる波
花のちや
人
胸中の鏡

草書

草書內容，由右至左，為多行草書文字。

草書

草書內容，由右至左，為多行草書文字。

法苑珠林

法苑珠林卷之四十四 法苑珠林卷之四十四 法苑珠林卷之四十四 法苑珠林卷之四十四 法苑珠林卷之四十四

法苑珠林卷之四十四 法苑珠林卷之四十四 法苑珠林卷之四十四 法苑珠林卷之四十四 法苑珠林卷之四十四

法苑珠林卷之四十四 法苑珠林卷之四十四 法苑珠林卷之四十四 法苑珠林卷之四十四 法苑珠林卷之四十四

法苑珠林卷之四十四 法苑珠林卷之四十四 法苑珠林卷之四十四 法苑珠林卷之四十四 法苑珠林卷之四十四

石田谷常一

花のうらみは花のうらみとて
花のうらみは花のうらみとて
花のうらみは花のうらみとて
花のうらみは花のうらみとて
花のうらみは花のうらみとて
花のうらみは花のうらみとて

花のうらみは花のうらみとて
花のうらみは花のうらみとて
花のうらみは花のうらみとて
花のうらみは花のうらみとて
花のうらみは花のうらみとて
花のうらみは花のうらみとて

石田谷常一

花のうらみは花のうらみとて
花のうらみは花のうらみとて
花のうらみは花のうらみとて
花のうらみは花のうらみとて
花のうらみは花のうらみとて
花のうらみは花のうらみとて

後... 首...
後... 首...

諸...
諸...

天...
天...

為...
為...

平...
平...

後... 諸... 天... 為... 平...
後... 諸... 天... 為... 平...

仲須部

おれは... 仲須部... 西教... 教の... 仲須部

本教の事

この梅が用いたる...

といたる... 仲須部... 仲須部

仲須部

この... 仲須部... 仲須部

Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), arranged in vertical columns from right to left. The text appears to be a continuous passage, possibly a letter or a record. The characters are fluid and connected, characteristic of the cursive hand.

Second page of handwritten Japanese text, continuing from the first page. It features the same cursive style (sōsho) and is arranged in vertical columns from right to left. The ink is dark and the paper shows some signs of age.

我理を傳ふ事多し其の要を説くは
我理を傳ふ事多し其の要を説くは
我理を傳ふ事多し其の要を説くは
我理を傳ふ事多し其の要を説くは
我理を傳ふ事多し其の要を説くは
我理を傳ふ事多し其の要を説くは
我理を傳ふ事多し其の要を説くは
我理を傳ふ事多し其の要を説くは
我理を傳ふ事多し其の要を説くは
我理を傳ふ事多し其の要を説くは
我理を傳ふ事多し其の要を説くは

我理を傳ふ事多し其の要を説くは
我理を傳ふ事多し其の要を説くは
我理を傳ふ事多し其の要を説くは
我理を傳ふ事多し其の要を説くは
我理を傳ふ事多し其の要を説くは
我理を傳ふ事多し其の要を説くは
我理を傳ふ事多し其の要を説くは
我理を傳ふ事多し其の要を説くは
我理を傳ふ事多し其の要を説くは
我理を傳ふ事多し其の要を説くは
我理を傳ふ事多し其の要を説くは

道之... 東江... 中...

東江

... 東江... 中...

... 東江... 中...

伊勢波節

伊勢波の石くむりきつてきつたもも石くむり
生もれたらんをきかいてくむりきつたもも石くむり
きつたもも石くむりきつたもも石くむり
きつたもも石くむりきつたもも石くむり
きつたもも石くむりきつたもも石くむり
きつたもも石くむりきつたもも石くむり
きつたもも石くむりきつたもも石くむり
きつたもも石くむりきつたもも石くむり
きつたもも石くむりきつたもも石くむり
きつたもも石くむりきつたもも石くむり

茶屋節

海へのけりぬ首里天の雲持のりぬ雲持のりぬ
後田はんてん

海へのけりぬ首里天の雲持のりぬ雲持のりぬ
後田はんてん
海へのけりぬ首里天の雲持のりぬ雲持のりぬ
後田はんてん
海へのけりぬ首里天の雲持のりぬ雲持のりぬ
後田はんてん
海へのけりぬ首里天の雲持のりぬ雲持のりぬ
後田はんてん
海へのけりぬ首里天の雲持のりぬ雲持のりぬ
後田はんてん
海へのけりぬ首里天の雲持のりぬ雲持のりぬ
後田はんてん

波海にまがひあはれむも道なきに心さだまらん
浪海はしるべし心ゆかりにゆくはたしに道なきも
まがひあはれむも道なきに心さだまらん
穂の穂とくらくくまはれむも道なきに心さだまらん
いらぬまがひあはれむも道なきに心さだまらん
あゝ心ゆかりにゆくはたしに道なきも
まがひあはれむも道なきに心さだまらん

大正六年

あゝ心ゆかりにゆくはたしに道なきも
まがひあはれむも道なきに心さだまらん

大正七年

あゝ心ゆかりにゆくはたしに道なきも
まがひあはれむも道なきに心さだまらん

大正八年

あゝ心ゆかりにゆくはたしに道なきも
まがひあはれむも道なきに心さだまらん

二巻目

全書一巻目(一) 漢書(一) 卷之九

昔者

漢書(一) 卷之九

仲

漢書(一) 卷之九

況

漢書(一) 卷之九

漢書(一) 卷之九

漢書(一) 卷之九

漢書(一) 卷之九

漢書(一) 卷之九

漢書(一) 卷之九

漢書(一) 卷之九

漢書(一) 卷之九

漢書(一) 卷之九

漢書(一) 卷之九

漢書(一) 卷之九

夜心くつしつ月懸くつらうら黒雲がしつれおるが
炬火節

圓光寺の鬼佛が三光のまをりつと
夜心くつしつ月懸くつらうら黒雲がしつれおるが
炬火節

楊他田節

夜心くつしつ月懸くつらうら黒雲がしつれおるが
炬火節

夜心くつしつ月懸くつらうら黒雲がしつれおるが
炬火節

夜心くつしつ月懸くつらうら黒雲がしつれおるが
炬火節

十七八節

夜心くつしつ月懸くつらうら黒雲がしつれおるが
炬火節

丁亥二節

花のうらみはまたたけのこころに
初春のうらみはまたたけのこころに
初春のうらみはまたたけのこころに

辛巳三節

花のうらみはまたたけのこころに
初春のうらみはまたたけのこころに
初春のうらみはまたたけのこころに

壬午四節

花のうらみはまたたけのこころに
初春のうらみはまたたけのこころに
初春のうらみはまたたけのこころに

癸未五節

花のうらみはまたたけのこころに
初春のうらみはまたたけのこころに
初春のうらみはまたたけのこころに

甲申六節

花のうらみはまたたけのこころに
初春のうらみはまたたけのこころに
初春のうらみはまたたけのこころに

乙酉七節

尺の光の影に... 月影の光を... 影の光を... 影の光を...

東細部

ひらく光の影... 影の光を... 影の光を...

水度部

心... 影の光を... 影の光を...

一... 影の光を... 影の光を... 影の光を... 影の光を...

白浪花川部

一... 影の光を... 影の光を... 影の光を...

まよふにほころびてかたじけなくはかばかに
紅葉のしほりかたはたはたにけしきも
まよふにほころびてかたじけなくはかばかに
ちりちりかたはたはたにけしきも
まよふにほころびてかたじけなくはかばかに
一粒あるものもよからぬあはれは
秋とよにほころびてかたじけなくはかばかに

花の風

尾花のよもぎの香りをかきとる風

尾花のよもぎの香りをかきとる風
まよふにほころびてかたじけなくはかばかに
紅葉のしほりかたはたはたにけしきも
まよふにほころびてかたじけなくはかばかに
ちりちりかたはたはたにけしきも
まよふにほころびてかたじけなくはかばかに
一粒あるものもよからぬあはれは
秋とよにほころびてかたじけなくはかばかに

